

# 平成 28 年度第 2 回飯田市総合教育会議 会議記録

日時：平成 29 年 3 月 15 日（水）

午後 3 時 30 分から 4 時 30 分

場所：飯田市役所 A301・302 号会議室

## 1. 開 会

(今村総合政策部長)

定刻になりましたので、平成 28 年第 2 回総合教育会議を始めさせていただきます。本日の司会を務めさせていただきます、総合政策部の今村でございます。よろしく願いいたします。最初に市長からあいさつを兼ねまして、平成 29 年年頭所感及び市政経営の方向の説明をよろしく願いいたします。

## 2. 市長あいさつ

### 「平成 29 年 年頭所感及び市政経営の方向について」

(牧野市長)

みなさん、こんにちは。平成 28 年度第 2 回総合教育会議の開催にあたりまして、一言ごあいさつを申し上げ、合わせて平成 29 年年頭所感及び市政経営の方向につきましてお話させていただきます。

委員の皆様におきましては、年度末も近づいてお忙しい中、この総合教育会議開催にあたりましてご出席いただき、ありがとうございます。また、日ごろから飯田市の教育行政に関わりまして、大変なご尽力をいただいていますことに敬意を表しますとともに感謝申し上げます。

昨日、教育長にもご臨席いただきまして、りんご並木において、行幸啓の記念碑の除幕式がありました。飯田東中学校の生徒さんたちにもご出席いただくなかでの除幕式でございましたが、教育長からもお話をしていただき、私からも話をさせていただきました。今年は飯田の大火から 70 年という節目の年ということで、りんご並木の原点を見つめ直すといった意味もあり、そこからリニア・三遠南信時代の未来に向けて展望していくという意味からも、非常に大きな節目にあたる年です。そうしたことから、まさに過去と未来を結ぶ接点が、昨日のりんご並木の記念碑の除幕式にあったのではないかと改めて感じたところでございます。

飯田のこれからの人材育成をどう進めていくか、まさにこの「いいだ未来デザイン 2028」の中で、地育力による未来につながる人づくりをどのような形で進めていくか、そのことを昨日の除幕式でも考えたところであります。そこで出てきました 1 つの認識が、「ビルド・バック・ベター」。過去よりも良いものを、困難を乗り越えて作り上げていこうという言葉、天皇陛下のお言葉として記念碑に刻まさせていただきました。この言葉は、我々のこれからの人材育成のあり方にもつながるのではないかと、そういう言葉として重ね合わせて考えたところであります。

年頭所感と市政経営の方向であります。簡単に言いますと、今の右肩下がりの時代において、もちろん非常に優秀な方が社会を変革する、イノベーションを起こすような発明をするということも大事だとは思いますが、「一人による百歩」よりも「百人による一歩」、みんなが意識を共有して当事者意識を持ち、そして同じ方向に向けて一歩を踏み出していく。そうした積み重ねをしていく中で変革を起こしていくということも、非常に大事ではないのでしょうか。特に右肩下がりの時代では、このようにみんなが意識を共有して、そのままにしておけばどんどん下がっていくことに歯止めをか

けて、右肩上がりの方向にどのようにもっていったらいいのか、現状をどうすればいいのかを考えていくことが大事になってくるということを書かせていただいております。

生活の質（QOL）の向上はよく言われることでありますが、私はそれに加えてこの百人による一歩を実現するコミュニティの質（QOC）についても向上させていく、その努力が必要だということを書かせていただいております。その後、私に関わっております国の取組について書かせていただきまして、飯田市が行っている取組が全国でもモデル的に注目されているということをお願いさせていただきます。そして、「イノベーションが起こる地域社会の創造に向けて」ということで、当事者意識を持った皆さん方が共創の場をつくる、共に新しいイノベーションを起こしていこう、そういったイノベーションの創発に結びつけていける地域社会をつくっていったら、と。これまでのような人と人が競い合う「競争」から共に創っていこうという「共創」へ、そしてトップダウンからむしろ「百人の一歩」のようなボトムアップの考え方で、他と比べていい地域だという考え方ではなく、誰もが認める「善い地域」を目指していこうということを書かせていただいております。

そういうわけで、今年の漢字一文字には「質」という漢字を挙げさせていただきました。これは、先ほど申しました生活の質、コミュニティの質といったクオリティという意味もありますし、産業づくりで言えば製品の品質の向上といった意味、人づくりで言えば物事の本質をしっかりと捉える人づくり、そうしたことを意識して「質」という一文字を挙げさせていただきます。1月4日の仕事始めの時に、私は今年の漢字一文字ということで、この「質」という一文字を表させていただきます。その後、4月から新たにスタートします「いいだ未来デザイン2028」、新たな総合計画に沿って、市政経営の方向について述べさせていただきます。新たな産業振興の拠点整備におきましては、人材育成も含めて、産業振興と人材育成の拠点として整備していこうということで、いよいよ信州大学の航空機システム共同研究講座が4月から開講が予定されているという状況にあります。また、リニアの取組につきましても、リニア本体に合わせて、道路ネットワーク、駅周辺、そうした関連する社会資本整備も進んでいくことになるかと思っております。そうしたなかで、「いいだ未来デザイン2028」に沿った形での予算編成をさせていただきます。現在その予算案が3月の定例会に諮られている最中でありまして。

その「いいだ未来デザイン2028」の中に12の基本目標が掲げられておりますが、基本目標1が「若者が帰ってこられる産業をつくる」、基本目標2が「飯田市への人の流れをつくる」、基本目標3が「地育力が支える学び合いで、生きる力を持ち、心豊かな人材を育む」といった若い皆さんを意識した、人づくりにも関係する目標が掲げられております。それぞれの取組については省略させていただきますが、こうした「いいだ未来デザイン2028」もみんなで一緒になってここまでつくって来てくれたということもあります。今日はそうした「いいだ未来デザイン2028」も踏まえた形でご意見をいただきたいと思っておりますし、これからコミュニティスクールをはじめ教育委員会として新たな取組をされていくなかで、それぞれの思いについてお話をお聞かせいただければ、と思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます、私からの挨拶とさせていただきます、簡単ではございますが市政経営の方向の話とさせていただきます。

### 3. 協議事項

#### (1) 飯田市教育大綱（案）について

(今村総合政策部長)

それでは協議事項に入らせていただきます。「飯田市教育大綱（案）について」ということですが、この「飯田市教育大綱」につきましては、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」で、総合教育会議において、首長と教育委員会とが協議・調整し首長が策定するというようになっております。本日、案をご提案申し上げますのでご協議いただきたいと思います。それでは事務局からご提案申し上げます。

(松下文化財担当参事)

それでは「飯田市教育大綱（2017－2020）」と、文部科学省から出ている教育委員会制度の改革に関する資料、その2つをご覧ください。平成27年4月に大きな見直しが行われ、新たな教育委員会制度がスタートいたしました。その内容につきましてはお手元にお配りしてあります、文部科学省から出された資料をご覧くださいと思います。その教育委員会制度の見直しの一環として、教育大綱の策定につきまして、先ほど総合政策部長が申しました「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の中に、新たに位置づけられた経緯があります。具体的には首長が地域の実情に応じて、教育、学術また文化の振興に関する総合的な施策の大綱を定めることが規定されているわけであります。また、この大綱を定める、また変更する際には、総合教育会議において協議することとされております。

教育大綱の運用にあたっては、文部科学省資料の最終頁のQ&AのQ6をお目通しいただきたいと思います。地方公共団体において、教育振興基本計画を定めている場合は、この教育振興基本計画をもって「大綱」に代えることができるということが運用上示されておりますので、平成28年度までは総合教育会議での協議を経て、飯田市教育振興基本計画を飯田市教育大綱に代えて運用してきたという経緯があります。次年度以降、これをどのようにしていくかということですが、飯田市においてはまちづくりの総合計画であります「いいだ未来デザイン2028」を、また、教育委員会においては教育振興に関する施策の総合的、計画的な振興をはかる基本方針であります「第2次飯田市教育振興基本計画」を策定いたしまして、いずれの計画も平成29年度からスタートさせます。このように、飯田市、教育委員会ともに29年度は大きな節目になる年度ということで、これを機に両方の計画の関係性と飯田市における教育の根本的な方針を明らかにするために、教育振興基本計画の代替ではない、飯田市としては初めてとなる教育大綱を定めることが良いのではないかと考えまして、本日も協議いただきたいと思います。

なお、協議いただく案ですが、市長及び市長部局との事前協議において、教育委員会側で案を作成して提案する形態が飯田らしい方法ではないかということでお話をいただきましたので、1月から3月までの定例教育委員会を経てまとめた案を、教育委員会事務局から本日説明させていただきます。

それでは、大綱の内容についてご説明いたしますので、資料をご覧ください。タイトルにつきましては「飯田市教育大綱」とさせていただきます。この大綱の対象期間につきましては、2017年度から2020年度までの4年間としております。4年間の期間設定につきましては、市長の任期が4年であること、「いいだ未来デザイン2028」、「第2次教育振興基本計画」とともに、4年ごとに基本目標や重点取組の見直しを行うというサイクルになっているため、その期間に合わせることも適当ではないかという考え方によっております。

続いて、大綱の根本的な理念としては、漢字一文字の「結」を掲げております。この「結」は、そもそも人々が労力を出し合う相互扶助のしくみですが、「飯田」の語源とも言われているものであります。とりわけ教育においても、心を通わせ、力を合わせる「結」の精神を大切にして、学校、家庭、地域、行政、機関・団体等の多様な主体が「結の心」でつながって、心を一つに、第2次教育振興基本計画の教育ビジョンに掲げている、「地育力による 未来をひらく 心豊かな人づくり」に向けて取組をすることが必要であるということで、この「結」を飯田市の教育の根本的な考え方として据えてはいかがかという提案になっております。

次に、「結」の理念を実現するためにポイントとなる3つの視点を掲げております。1つ目の視点は、「組織と計画を結ぶ」。これは、人づくりにつながる教育関連施策は、「第2次飯田市教育振興基本計画」によることを基本とすることをまず確認し、この「飯田市教育振興基本計画」を、産業づくり、人づくり、地域づくりを含めた総合計画である「いいだ未来デザイン 2028」と有機的に結びつけて、市長部局と教育委員会が連携し、さらには、様々な組織が協力し合って、教育ビジョンに向けた実践を進めていく視点を持つということを示してあります。

続きまして2つ目の視点は、「地域と教育を結ぶ」ということです。これまでの飯田の歴史の中で育まれてきた教育を重んじる気風、また学びが盛んな土壌、そこから生まれてくる地育力を生かして、学校教育においては、平成29年度から本格的にスタートするコミュニティスクールの仕組みを生かした地域が参画した学校教育の推進、また、29年度から本格的にスタートする「いいだ未来デザイン 2028」に基づく田園回帰の各地区の取組に合わせて、人づくりを担う公民館と地域づくりを担う地域自治組織等が連携・協働して、20地区が輝く自治の力を原動力とした地域づくりを進めていくということを記載しております。

さらに3つ目の視点は、「過去と未来を結ぶ」ということです。この飯田の地については、古墳時代から日本の東西を繋ぐ交通、交易の結節点として、独自の産業・文化・人材を生み出し、日本の国づくりに重要な役割を果たしてきた歴史的な経緯があります。こうした飯田が本来的に持っている地勢と潜在力を生かして、新たな価値と文化を創造・発信しながら未来をひらいていくということを、教育文化振興においても、市長部局と教育委員会が連携して取り組んでいこうというものであります。具体的なものとしては、当地域において市民・行政が協働した調査研究活動の中で培ってきた知見と、地域外からの専門的・客観的な知見の融合を図り、これからの時代の地域振興に有益な新たな価値を創発する「地域振興の知の拠点」づくり、このことに重点的に取り組んでいくことをポイントとしております。

以上、29年度を起点とする4年間において、教育理念を「結」とする飯田市教育大綱についてご説明をいたしました。なお、別添の資料については、左側に「いいだ未来デザイン 2028」の骨子を、右側には「第2次飯田市教育振興基本計画」の骨子をお示しし、これを結ぶ中心部に教育大綱があるということを表す概念図です。参考資料として添えさせていただきました。

(今村総合政策部長)

それでは、教育大綱案について協議に入りたいと思います。発言のある方は、挙手をお願いいたします。

(代田教育長)

説明にもありましたが、この大綱について、1月から3月の定例教育委員会の中で議論してまいり

ましたので、その背景と私自身の思いを含めて補足させていただきたいと思います。少し話は逸れますが、私が教育長に任命、承認されてからちょうど1年が経とうとしております。その中で、来年度の予算編成というのは大きな仕事であったと思いますが、市の子育て、また教育に対する大きな方向づけの中でしっかりとした予算審議を行っていただき、改めて感謝申し上げます。

私も教育長1年目ということですが、実は教育長として学ぶ研修の機会というのは日本に2つしかありません。神戸教育大学での教育長の研修会、筑波市が主催、文部科学省が後援という形での教育長会議の2つです。そこで研修をして集まる中で、やはり大きな問題は、どうやって人・もの・カネという市の資源を、教育行政に持ってくるかということです。最終的には予算や人材が、今の教育行政の中には足りていないという議論が出てきて、現場の教育や社会教育が非常に課題を抱えてくる中で、足りない予算や人材をいかに獲得するのかという話になります。そこで、今回の大綱の原点にもなりますが、私自身は予算も人も限られた中で、その奪い合いを市の中でやってもしょうがない、いかにコラボレートするか、1+1を3にしていく発想がとても大事ではないかと思っております。飯田市が、飯田の地が大事にしてきた心を通わせ、力を合わせるということが、まさに教育行政の中でも必要になってきているのだろうと思うことが、今回の「結」という大きな大綱の出発点になったと思っております。

実際の具体的な理念実現のための方向性としては、1番目に「組織と計画を結ぶ」を挙げました。実際に私が1年間経過してみる中で、組織と計画をうまくコラボレートする事業というのはたくさんあるだろうと思います。例えば、来年度スタートするICT教育。これは子どもたちのためだけではなく、地域の連絡や地域同士の活性化、コミュニケーションに十分役立つツールだと思っております。教育委員会だけでは「子どもたちのためだけ」と限定されますが、いろいろな部署とつながることによって、もっと付加価値のある取組にできるのではないかと、この「いいだ未来デザイン 2028」と結びつくことにより、教育政策がより充実してくるのではないかと考えています。

また、2番目の「地域と教育を結ぶ」ということでは、今年度教育委員会として一番大きく取り組んだことのうちの1つが、飯田コミュニティスクールの成立です。2月末に28ある飯田市全ての小・中学校から学校運営協議会の委員が提出されましたので、いよいよ3月に成立するという段取りを組んでいます。地域がいい学校をつくるという意味では、この飯田の地は本当にコミュニティの力が強いので、順調にスタートするだろうと思います。「いい地域がいい学校をつくる」、この段階までは今でもできているのかもしれませんが、しかし、この「結」の「地域と教育を結ぶ」というところでは、次のステージまで見越したい。つまり、スクールコミュニティの発想、「いい学校がいい地域をつくる」ということです。学校が地域を良くしていくところまで昇華をさせて、いい学校がいい地域をつくり、いい地域がいい学校をつくるというサイクルを回すために、この「地域と教育を結ぶ」という方向性を書かせていただきました。

3点目は「過去と未来を結ぶ」ということです。私は今日、座光寺小学校の卒業式に行っていました。座光寺小学校では地域を学ぶということが盛んで、1500年前からこの地が日本の国づくりの重要な役割を果たしてきたということが口々に出る卒業式でありました。「10年後、この地の利、地勢を生かしながら、再び日本の国づくりに重要な役割を果たす、そんな座光寺になっていきたい」といった声も聞かれました。そうした過去と未来を結ぶ中で飯田市の未来をデザインしてくるとき、これは教育委員会だけではできないことで、市長部局、また市民の方々とも連動していかなければ難しい方向性だと思い、3点目の「過去と未来を結ぶ」という方向性を出させていただいた次第です。繰り返しになりますが、教育の抱えている課題というのが非常に広範囲にわたり、また、教育委員会だ

けでは解決できない課題が多くなっていく中で、ぜひ上手く市長部局と連動できると良いと思っております。

(小林職務代理)

私はこの教育大綱の「結」の文字と、教育ビジョンにあります「地育力による 未来をひらく 心豊かな人づくり」に関して、思いを話させていただきたいと思っております。この教育大綱の理念「結」の概念の中に、飯田市教育委員会また市が約 12 年間大事にしてきた「地育力」という言葉も内包されているのではないかと考えております。「地育力」という言葉は牧野市長の造語であります、12 年の間に学校教育現場でもこの言葉が定着し、「地育力」を大事にした教育活動が展開されるようになってきていると思っております。これは、市長自ら教育分野における人づくりを大事にして、例えば「ふるさと竜東の集い」、「キャリア教育推進フォーラム」に参加いただきエールを送っていただいたり、市の校長会や中学校区の講演会、飯伊市町村教育委員会連絡協議会の総会において講演いただいたりして、「地育力」の大切さを解き明かしていただいたおかげでもあったのではないかとと思っております。

新教育委員会制度が発足して、教育が大きく変わったと言われておりますが、この飯田の地におきましては、市長部局と教育委員会がそれぞれの役割、分担を明確にしながら目指す方向を共有してきたことが非常に大きかったのではないかとと思っております。具体的な例として、子どもたちの成長について申し上げたいと思っております。今年度も市長に参加していただきました 1 月 28 日の「キャリア教育推進フォーラム」ですが、中学生のジュニアリーダーが中心となって運営したのは例年通りですが、今年度は地域社会に関わる生き方について考えるというテーマで討論が行われました。ステージのジュニアリーダーの中学生もフロアの中学生も大勢参加して、非常に積極的に堂々と自分の地域に関わる姿を語り合っておりまして、飯田市の中学生もたくましく成長したなど実感し、頼もしく思いました。その中で、ある中学生が地域の運動会に参加してみたところ、競技種目がマンネリ化している、自分たちも参画して競技種目を見直したいと発言してくれました。まさに地育力によって育てられた中学生が、自分も地域を担って地育力を育てていくという、いい循環が生まれてきているのではないかとと思っております。

この大綱の理念である「結」は手段であるとともに、目標でもあり目的でもあると思っております。様々な結びつきを大事にしながら、この飯田の「結」の精神をさらに深め合う、学び合う地域。論語の言葉を借りれば「恕」、思いやりの心で協力し合う地域を目指していきたいと思っております。

また、今回教育振興基本計画のビジョンに追加された「未来をひらく」という言葉は、極めて広く様々な内容が含まれているように思います。昨今の世界の潮流は、自国中心主義の方向に動いておりますが、自分の国を大事にしながらも排他主義に陥らずに、違いを大事にしながら様々な国の人々を理解しながら協力していく。このことが、これからのグローバル社会を生き抜く人には大事ではないかと思っております。また、未来をひらいていく子どもたちには何よりも家庭での愛情が大事であり、子育て分野においても市長部局の皆さん方にもご協力いただきながら、この教育大綱の実現に向けて尽力してまいりたいと思っております。

(総合政策部長)

それでは今の発言を踏まえまして、市長からお願いいたします。

(牧野市長)

今教育長、職務代理からお話をいただきまして、教育大綱の理念とその理念の実現のためにという思いを、私も強めることができたと思っています。「結」という考え方は、飯田におきましては非常に重要な言葉だと常々思っております。飯田の語源、この地域の語源とされる人と人の結びつき、あるいは地域と人との結びつき、様々なものとの結びつきを表すこの「結」という言葉は、飯田にとって大切な理念だと思っております。それを教育大綱の中心の理念に据えられたことについて、今のお二方のお話を聞いて、これからの人づくりを考えていく上で非常に大事な理念が提示されたという思いをいただきました。

先日、東京大学・牧野篤先生のフィールドスタディの調査報告発表会がありました。実は4月1日発行の広報いいだのエッセイ「散歩道にて」にも書きましたが、一番印象深かったのは報告書の最後に書かれていた、牧野先生のところに韓国から来ていらっしゃる李先生の言葉です。「私の故郷も飯田と同じくらいの規模でとても自然が豊かなところがあり、産業もあって、町としては非常にいい町だと思うけれど、私はこれまで一度もその故郷に帰りたと思ったことはない」とはっきり書いてあるのです。どうしてそう思っているのかを自分でもよくわかってはいなかったけれども、飯田のフィールドスタディを通して、なんとなくわかってきた。それは、「私は小学校、中学校、高校を通して、いわゆる受験勉強をやってきて、まったくと言っていいほど地域との関係を持たなかった」と。私は、李先生は本当に率直で正直だと思ったのです。そこを明らかにしていただいて、「だから、今も私はまったく地域に帰ろうという気が内面から起こらない」とまで書き、そして、それがどうしてかという理由が、飯田のフィールドスタディを見ていてようやくわかったと書いてあります。

飯田の今の「地育力による心豊かな人づくり」は、まさにそうした李先生の子ども時代とは対極にあるものを目指そうとしているわけです。地域との関係を、コミュニティスクールや「地育力による心豊かな人づくり」を通して、もっともっと深くしていこう。そういうことをすることによって、この地域との「結」の関係をさらに深めていこうということです。

地域というのは、歴史、文化もですが、人の営みの積み重ねの中であつてつくられてきているわけですから、人がいなくなってしまうたら、それまでどんなに素晴らしい歴史、文化、あるいは自然を持っていても、結局廃れてしまうわけです。ここに人が住み、人の営みが永続していくということで、歴史や文化、これまでみんなで作ってきたものの積み重ねが生きてくるわけです。住む人が本当にいなくなってしまうたら、結局それまで積み重ねてきたものがみんな無に帰していつてしまうわけで、ロスワールドになってしまうわけです。そう考えますと、やはりここでこうした教育大綱をつくり、過去から未来をしっかりと結び、この地域の将来につながるような人材育成をしていこうということをしつかり謳っているということは、右肩下がりの時代、人口減少・少子化と言われている地域にとって本当に大事な時だからこそ、こうしたことをやっていかなければいけないと思うところでございます。

(今村総合政策部長)

教育大綱について、ご協議いただきました。まだまだご発言があったかと思いますがお時間もございますので、飯田市の教育大綱につきましては、本日ご説明させていただき、ご協議いただいたこの案を素に策定を進めていくということをご確認いただいたとさせていただきます。

#### 4. 意見交換

(今村総合政策部長)

次の意見交換に入らせていただきます。限られた時間ですが、教育委員のみなさんが日ごろ感じている教育に関する課題について、市長との意見交換の場ということで予定しておりますので、ご発言のある方は挙手をお願いいたします。

(三浦委員)

この12月に任命をいただきまして、まだ市長に、「三浦を任命して良かった」と言っていたくほどの知識がない中での発言で、お許しいただきたいと思います。

4か月ほど教育委員をさせていただきまして、いろいろな研修も出ささせていただき、教育の視点から市政を見るということを楽しんでいるという気持ちでさせていただいております。大綱にもつながることではありますが、いろいろ見させていただくなかで、飯田の地に価値を見出すということは、この地が知的好奇心を刺激する場であるということにつながるのかなと思うところです。先ほどの市長のお話にもありましたが、これからコミュニティスクールが始まり、また、研修会を通じて公民館活動が盛んなことを改めて思い出すなかで、こうしたことが子どもたちにとって、飯田市にはこういうものがあるということを知ることにつながり、そこから刺激を受けて楽しく思う、また価値だと思うという機会になることがとても大切なことだと思います。

もう1つは、飯田市には学輪 IIDA があり、これにはいろいろな大学が入りまして、フィールドワークということで研究を行っています。例えば OIDE 長姫高校、下伊那農行高校、飯田風越高校の国際科など、それぞれ分野のある高校ではモデル研究を行っています。また、学輪 IIDA でいろいろな大学や研究機関が入って行われている研究のあり方というものを、中学生・小学生という子どもたちが実際に目にするような機会があると、財産と言いますか、知的好奇心を刺激させられるような場所が飯田にはあるということに気づくきっかけにもなるのではないかと思います。そうした点から、実際に子どもたちの目に触れるようなものがあるといいのかなということも感じるところです。

先ほどの大綱の「結」ということで、ローカルに、そしてグローバルに LG 教育という形で結んでいくというお話もありました。コミュニティスクールやリニアといったもので、子どもたちの知的好奇心が刺激されるようなもの、強いて言えばこの地に価値を見出せるようなものが教育でつながっていけばいいかなと思いました。

大綱の「結」という言葉ですが、市民の一人としまして、本当に馴染みのある言葉です。市長が言われていた「百人の一步」という言葉がありましたが、心を本当に1つにして向かっていく、そういった人材育成というものが、この「結」という大綱ではっきり示されたことは本当に価値のあることで、とても素晴らしい大綱ではないかと、個人的には思うところです。

(伊藤委員)

この大綱をつくるにあたりまして、「結」という字をこれほどに長く見て考えたことは、今までありませんでした。飯田には立派な「結」という財産があると思いました。その「結」ということに関しまして、教育委員会の段階では水引の絵がなかったのですが、本日の資料では水引の絵が付きまして、市長も胸に付けられています。考えてみれば飯田には元結があつて水引産業もあるということなのだと改めて思いました。



私は今日、上郷小学校の卒業式に行き、コミュニティスクールの指定証を渡してきました。このことについて、感想を述べさせていただきます。今日のこの総合教育会議というのは、大津のいじめの事件に端を発して行われるようになりました。そして、教育大綱については、飯田の場合、今までは教育振興基本計画を大綱としており、今回初めて教育振興計画で代替しない大綱というものがつくられました。こうなる以前の教育委員会は形骸化しているということが指摘されたわけですが、私のような教育とは関係のない者が教育委員になったことについても言われたこともありました。私の生まれる前の話ですが、民主改革によってレイマンコントロールの考え方で教育委員会はスタートしたわけですが、今日、コミュニティスクールの指定証を飯田市の小・中学校全てに出した時点で、レイマンと一緒に学校運営、学校経営できるレイマンコントロールの本当のスタートになった、そんな感じを持ちました。コミュニティスクールのルールがここでしっかり敷かれて、飯田の場合は地育力がありますので、ルールの上に電車が乗ってまさにこれから電車をどう動かすか、そんな時にきたと思っております。レイマンコントロールから始まって今日のコミュニティスクールまでに、覚醒の感があるなという感情を受けました。

(小澤委員)

「地域の子どもは地域で育てる」と、よく公民館の方たちが言うので、ハンディを持った子どもたちもやはり地域で育てていくべきだと思っております。その中で、今年度から副学籍というものが設けられてありがたく思っているのですが、車いすの子どもにはスロープが必要なように、また耳が聞こえない子どもには手話、目が見えない子どもには点字があるように、知的障害を伴う自閉症の子どもには、視覚支援というものがすごく大切な支援となってきます。いくつか学校訪問をさせていただいた中で、支援学級だとその支援がきちんとされていたので、そこにいる子どもたちはすごく落ち着いて生活していました。視覚支援をすることによって、そうした子どもたちはすごく落ち着いた生活をして、ハンディを持っていない子どもたちよりもすごい力を出すことができる場合もあるのです。ですので、そうした支援が世の中に広まっていけば、そうした子どもたちも生きやすく、みんなと一緒に生活ができていくのではないかと思います。

そうした中で、スポーツ推進委員の田中さんが、障がいのある人を集めてスポーツをするのではなく、障がいのある人たちができるスポーツをまず自分たちが楽しんで、そこに障がいのある皆さんをお呼びしようという考えを持ってくださっていてありがたいと思います。そこにも支援を取り入れていただけると、さらにいいと感じております。

(小林職務代理)

「心豊かな人づくり」といった場合、どうしても学校の先生方に頑張ってもらっていただき、また、私たちもできるだけ学校現場の先生を応援しないといけないと思っております。つい先日、今年度旭ヶ丘中学校に飯田・下伊那で初めて、LD等の追究初等教育ができてよかったと、校長先生方と話をしている中で、実はそれを担当する先生に非常に苦慮しているのだという話が出ました。力のある先生がいなくて苦勞するのかとお聞きしたら、数が足りないと言うのです。正規の力のある教員が足りないのかと思っていまして、講師の先生を含めても、先生がいなくて悩まれていたわけであり、極端な話、教員免許を持っていれば誰でもいいというようになってしまい、それでは学校力が心配になるということなのであります。

そこで私から提案なのですが、飯田市でも市職の正規の先生を雇用したり、講師を採用したりして

いるわけですが、若い先生、講師の先生を「ふるさと先生」というような名称で採用できないかということ。2から3年間、飯田市で働く中で力をつけてもらい、その後県の正規教員に採用してもらい、そうしたなかでふるさとに、地域に根差した教育を進めていってもらい。そうしたことをしながら、若い先生を育成するということを考えられないかと思うのです。

現に今、若い講師の先生方が働いていますが、正規の初任者の人には指導教員がつくのですが、その先生方には指導教員がつかないわけなのです。市に一定期間採用されれば、飯田市の教育支援指導主事の先生方に指導してもらえます。そうして指導力も育成し、また飯田独自のいろいろなことをやりながら、飯田市出身の若い先生方を育成できるのではないかと思ったわけであります。費用に関しましても、今まで働いている先生方に対する賃金だけで、新たな費用負担がないわけであります。

ですので、そうしたことを考えながら、いずれにしても飯田・下伊那で力のある先生をどのように育成していくかということをお早急にご検討いただく必要がある、そんな時代かなと思ひまして、また飯田市の教育委員会としても考えさせていただきますので、ご協力いただけたらと思ひます。

(代田教育長)

今の流れとは違う所をあえて言わせていただきますと、よく言われるのが「そんな良い取組、知らなかった。」ということ。小中連携・一貫して、何なんだとか、「今までやっていることを知らなかった」ということをよく聞きます。それは情報を発信する側のせいなのか、受け手に興味・関心がなかったのか、そこはわかりません。ただ、少なくとも課題があるということは事実で、もう少し理解や共感を得るような広報などで、知ってもらおうという努力をもっとしていかなければいけないと思ひます。

今年度コミュニティスクールを開催するにあたっては、市内28の全ての小・中学校の保護者会、20地区の地域協議会に行き説明はしましたが、これだけではだめだと思ひています。もう1回、「4年間くらい連続しますよ」といった説明の仕方をしないと、進行しないのではないかなと思ひながらも、やはり良い施策に対しては理解をしていただき、「百人の一步」の取組にするためには、情報提供、情報共有がすごく大切だと思ひました。

(伊藤委員)

先日の市政功労者表彰のときに、塩澤実信さんが「飯田は知熱のある所だ」と言われました。「ちねつ」の「ち」は地面の「地」ではなく、知識の熱、つまり学びの風土があるところだと言われて、言い得て妙だと思ひました。教育委員会は飯田市のその学びを支える様々な教育関連施設を抱えておりまして、教育振興基本計画の取組の柱の1つに、その教育関連施設のマネジメントを進めるということがあります。早急なものとしましては飯田文化会館にして、その改修等が日程に上ってくるわけでありまして、その時に関連する各課・館・所の連携は、飯田市は非常にできていると思ひますが、建物に関しましても、文化会館だけではなく、図書館、美術博物館も含めて検討していただけるといいと思ひます。非常に大きな視野で未来を見据えながら、これから先どうしていくのか、これは教育委員会だけではどうしようもない話にして、市長部局、市長の知恵をいただきながら、これからの長い将来に向かって考えていかなければいけないと思ひしておりますので、よろしくお願ひします。

(牧野市長)

最後の伊藤委員の話は、まさに地域振興の知の拠点をどうするかという話で、とりあえず歴史研究所は鼎東保育園の後を利用しようという話ですが、ゆくゆくはもう少しまとまったところに移転できないかという議論は内部でできてきているところでもあります。老朽化対策も含めて、そうした建物のうち、何をどこまでしていくかというなかで考えていかなければいけない、非常に重要な課題だと思っております。

先ほど三浦委員からも出た話ですが、大学と高校生の連携をどう進めるかということは非常に大事なことで、それを進める意味でも、学輪 I I D A の取組を通して大学とのネットワークをつくっています。今月末、ロンドン・ビジネス・スクールの皆さん 128 人が飯田の農家民泊体験にいらっしゃるのですが、世界 80 か国からロンドン・ビジネス・スクールに学びに来ている 128 人がわざわざ飯田に来るという話がありまして、これはいろいろな意味で非常に大事なきっかけになると考えました。もちろん農家民泊、インバウンド農家民泊と言いますけれども、そうした海外の皆さんを農家民泊で受け入れる経験をしようということもあるのですが、せっかく世界のトップエリートたちが飯田に来るといことで、高校生の皆さん方に「ぜひ交流をしてもらいましょう」と飯田風越高校の校長先生に言ったところ、他の高校にも声をかけてみるということ、多くの高校生の皆さん方が集まりました。そうすると、おそらくサポーターがいるということ、学輪 I I D A に声をかけたら、「私たちがサポートしましょう」と京都外国語大学が手を挙げてくれて、京都外大の大学生たちがサポートに入る。そのようなことも始まりました。

飯田はまさに「結」の世界で、人的ネットワークによりいろいろな所から話を持ってきてくれるのです。今回のロンドン・ビジネス・スクールも、たまたま飯田出身の方がロンドン・ビジネス・スクールに留学していて、こういう企画を組んだけれどもどうかと提案してくれたので実現したのです。こうしたものは、非常に大事だと思うのです。ここで育った人材がこういった形でこの地域に返してくれる、そうした仕組みは今後もどんどん出てくるのではないかと期待しています。

それから、レイマンコントロールの話まで出てくるというのはさすがだなと思いました。コミュニティスクールは今とても大事で、先ほど旭ヶ丘中学校の先生のお話がありましたが、私は全く別のところから、「私、実は今度、旭ヶ丘中学校のコミュニティスクールの委員になりました」という話を聞いたのです。どこで聞いたかという、上越教育大学です。そこに桐生先生という方がいて、実はその桐生先生は伊賀良在住なのです。伊賀良から上越教育大学に通っていらっしゃるのですね。桐生先生から、今度コミュニティスクールの委員になるという話を聞きまして、この地域にいる方で今までそういう力を十分発揮していなかったような方も、コミュニティスクールを一つのきっかけとして関わってもらおう。上越教育大学というのは、いわゆる先生を養成する大学ですから、その先生がコミュニティスクールに関わる中で、様々な視点からのご意見をいただけるのではないかと思います。

ですから、小林職務代理がおっしゃられた話というのは、あながち実現できない話というのではなく、むしろそうした皆さんが関わることによって実現の可能性が出てくるのではないかと、そんな感想を持ちました。ぜひ、コミュニティスクールを大事にしていければと思っております。

小澤委員から話があった発達支援の話です。昨年、国の予算の関係で、文部科学省でかなり時間がかかっていたのが職員の定数の話でした。少子化の中でも実は増えてくると言われているのは、1つは発達支援が必要な子どもたち、もう1つは外国人の子どもたちなのです。そうした子どもたちは増えてくるので、そこに关わる先生をいわゆる加配ではなくて、きちんと定数の中に入れていく必要があるのではないかとというのが、文部科学省から財務省へ予算要求した中身なのです。発達支援につい

ては、さきほど小澤委員とは逆のことを財務省は言ったのです。そんなことをして意味があるのか、といったことです。ここにいる方は怒ってしまうと思いますし、私も何を言っているのだと思いました。これに対して、全国の発達支援の団体の皆さん方が財務省に対して猛抗議をして、そこは結局財務省が尻込みをして決着がつかしました。

残ったのは、外国人の子どもたちをどうするのかという話です。これについては外国人集住都市会議ぐらいしか全国組織がないので、豊橋市長や小牧市長、私が財務省や文部科学省に行き、ここを何とか教員の定数に入れてもらわないと困る、我々がやっていることは決して限られた地域での話ではないのだと申し上げました。東海地域や北関東のように製造業が盛んな地域だけの問題ではないということです。財務省からは、特定の地域の話だとすれば、その地域に任せればいいのではないかという意見が出ていたのですが、これはもう全国的な話であるということです。それから、飯田のように過去の歴史から、いわゆる南米のニューカマーと言われる皆さんではなく、中国籍の皆さんが最も多いという地域もあるので、一律な考え方をされるのはおかしい。国策でそうしたことを進めてきた過去の歴史を、まったく考えていないではないかということまで申し上げました。そして、外国人の子どもたちについても最終的な予算決着では、入れていきますという話になりました。

そういうことで言いますと、先ほど申し上げた右肩下がりの話の中では、教育現場においてプラスの要因でいくというのはなかなか厳しい状況があると、私はこうした経験をもって思うのです。先ほど情報共有という話がありましたけれども、常にそうした現場の情報を発信していかなければいけないと思うのです。現場がこうだということをはっきりとそれぞれの立場で発信して、そして地域でこういうモデルをつくっていくのだから、これからは教育というものを現場からモデル的に捉えてほしいということを書いていかないといけないと、私は思います。今飯田市は発達支援に力を入れていますが、この地域の中でモデル的な取組を進めていくことができればと思っております。

## 5. 閉会

(総合政策部長)

短い時間でしたが、しっかりと意見交換をさせていただきました。これをもちまして、第2回総合教育会議を閉会させていただきます。今年度はこの2回で終了ですが、来年度も飯田らしい総合教育会議というものを開いていきたいと思っておりますので、ぜひ皆さんの意見をお聞かせいただきたいと思っております。本日はどうもお忙しい中、ありがとうございました。